

中華帝国の形成

今回学ぶこと

紀元前 1700 年ごろに殷王朝が成立して以降も、今日の中国のもとになるような統一国家ができるまでには長い年月がかかった。殷の時代には邑と呼ばれる集落が神を媒介としてゆるやかに結びついていた。周の時代には天子と諸侯の君臣関係にもとづく封建制度がおこなわれた。秦の始皇帝は天下を統一し、郡県制によって全国を統一的に支配しようとしたが、長くは続かず、漢は郡県制と封建制を併用する郡国制をおこなった。そして武帝の時代に再び天下が一つとなり、漢帝国が繁栄を迎えた。このような長い時をへて現れた中華帝国登場の歴史を見ていく。

調べておこう・覚えておこう

- 今日漢字のもとになった甲骨文字について調べてみよう。また漢和辞典で「父」「母」「王」「臣」など漢字の成り立ちについて調べてみよう。
- 春秋戦国時代の戦争について調べてみよう。武器や戦法の変化がこの時代の国の姿をどのように変えたか考えてみよう。
- 戦が得意でなかった劉邦と勇者であった項羽の死闘について調べ、なぜ劉邦が勝つことができたのか考えてみよう。また「先んずれば人を制す」「四面楚歌」など『史記』に由来することわざについて調べてみよう。

殷と周

中国は殷の時代から本格的な青銅器時代に入る。殷は当時としては世界的に見ても非常に高度な青銅器の製作技術をもっており、主に武器や祭祀の道具がつくられた。また甲骨文字にみられる文字文化、巨大な城壁や宮殿をもつ都市文化をもち、暦の文化ももっていた。殷の文化にはその後の中国文化のもとになったものが多くある。ただし、殷はまだ神を媒介として人々を支配する神権国家であった。前 11 世紀、殷を倒した周は、封建制をおこない、各地に諸侯を置いて統治を任せ、諸侯との間に君臣関係の秩序を築いた。このようにして周の時代に定められた社会の秩序を「礼」という。前 8 世紀前半には周王朝も衰えて鎬京から洛邑に都を遷し、各地の諸侯が自立していく春秋戦国時代に入る。周の礼は孔子によって儒家の教えに取りこまれ、20 世紀初めに清朝が滅ぶまで中国社会を支える最も基本的な秩序となった。

始皇帝の中国統一

周の諸侯が支配したのは邑と呼ばれる集落であったが、戦国時代の王は直接民衆を支配するようになり、しだいにその領域を広げて、ついには戦国の七雄と呼ばれる七つの強国が中国を分割するようになった。なかでも西方の秦は富国強兵の政策を強力に推し進め、最強の国へと成長した。前3世紀後半、秦王政はごく短期間の間に東方の六国を滅ぼして中国を統一し、中国最初の皇帝、始皇帝となった。始皇帝は文字やはかりの単位を統一し、全国を36の郡に分け、その下に県をおき、郡県には官僚を派遣して全国を一律に支配しようとした。さらに焚書坑儒をおこない、各地の思想や文化、歴史に関する書物を焼き払い、自らの考えに従わないものを生き埋めにした。そのうえ始皇帝は豪華な宮殿を建てたり、巨大な墓を造ったり、北方の匈奴との戦争を始めたしたりしたが、始皇帝の死後、人々はその負担に耐えかねて反乱をおこし、秦は短期間で滅びてしまった。

漢帝国の繁栄

漢は短期間で滅んだ秦の反省のうえに立ち、統一前の旧秦領を受けついだ漢の直轄地には郡・県を置き、東方の旧六国の地域には王や諸侯を置いて統治を委ねる郡国制をおこなった。また匈奴と正面から衝突することを避け、内政の充実に力を注いだ。こうして漢の建国から70年ほど経った武帝の時代には、王国や諸侯国は縮小削減され、皇帝の力が全国に行き渡るようになっていた。武帝は国力の充実を背景に、匈奴との大規模な戦争を始め、さらに領土を四方に拡大して始皇帝の秦を上回る大帝国を築いた。また匈奴に対抗するため張騫を西域に派遣し、西域諸国との交通を開いた。こうして武帝は、始皇帝以来途絶えていた封禪の儀式を泰山でおこない、また儒学を国の学問とした。一方で、武帝は膨大な戦費をまかなうために、塩・鉄・酒の専売制を始めたが、これは民衆を苦しめることにもなった。司馬遷は『史記』を著し、ついに一体となった中国人の歴史を書いた。